

◆ 巻頭言

“ポリス”を雇わなくてもすむために “ライブラリアン”を！

草谷 桂子

家庭文庫を開いて28年目になる。始めたころ文庫に来ていた子が親となり、今度はわが子を文庫に連れてくるようになった。長いスパンで子どもにかかわっていると、「どの時代のどの子ども本が大好き！」ということがよくわかる。

本を読むということは、本の作者からも、手渡してくれる大人からも、「あなたが大切」という愛情をいっぱいもらうこと。さまざまなモデルに出会い多様な生き方を知り、考え方や生き方の選択肢が広がること。自然や世の中の不思議を知り、好奇心が満たされて生活体験が深まること。ゆえに、どんな読書環境にいるかでその子の成長は大きく変わってくると実感している。昨今、人格欠損と思われる嫌な事件が多発しているが、豊かな人間形成には豊かな読書環境が必要だと思う。図書館先進国の欧米では「将来、ポリスを雇わなくてすむために、今ライブラリアンを！」が図書館振興の合言葉になっていると聞く。

文庫は、あくまでも公共サービスの隙間を埋めるだけ。水道や電気のように、全ての子どもたちにとって、必要なときにすぐに役立つ図書館が生活圏内であればどんなに幸せだろう。子どもたちが生活の大半を過ごす学校の図書館も、人がいて潤沢な資料があってこそ、学びを支援できる情報センターとして機能し、本を読む喜びが保障される。

しかし日本の図書館事情は欧米より100年遅れていると言われている。それなのに、昨今は安易に民間に委ねたり、職員を非常勤化する大きな流れがある。経費削減が主たる目的だから、継続性・専門性・公共性が求められる図書館の知的財産もノウハウもやせ細っていくばかりだ。

図書館で働く側からみてもワーキングプアという大きな問題をはらんでいる。低賃金の臨時雇用で、いつ雇用止めになるかわからない職員が増えた。しかもその担い手の多くは女性職員だ。

今年は「国民読書年」。掛け声だけではなく、実のある読書環境の充実を願っている。



PROFILE

草谷 桂子
(くさがやけいこ)

日本児童文学者協会・静岡図書館友の会所属。
静岡市で家庭文庫「トモ工文庫」を約30年間主宰する傍ら、絵本や児童文学の創作に励む。県主催の海外研修団への参加をきっかけに女性の自立についても関心をもち、ジェンダーの切り口での絵本の紹介や創作を行う。『絵本で楽しむ孫育て』(2006)や『ぼくはよわむし?』(2003)など、著書多数。